

OPIにおける韓国語話者の「もの」「こと」の使用と習得

坪根 由香里

〔要 旨〕

日本語の文を生成する際、形式名詞の「こと」は、文脈の中である事柄の代用語となったり、前接する文を名詞化する機能として用いられたりと重要な役割を果たす。また、「もの」は「こと」と対立する概念として学習者にとって理解しにくいものである。

本稿では韓国語話者のOPI (oral proficiency interview) データを用い、形式名詞「もの」「こと」の各用法について自然発話での使用状況を調査し、その習得について考察し、習得順序を探った。

調査の結果、「もの」「こと」共に、初級から中級、上級から超級の段階で使用数、種類が伸び、中級から上級の段階では、用法の広がりは見られないが形式名詞、名詞化の使用数の増加により、複雑な文を多く産出するようになることがわかった。また、各用法の正用者数の伸びから、中級は形式名詞、名詞化の用法等の構文的に必要な機能が習得される段階、超級は「というもの」「ということ」「Nのこと」や様々な文末表現といった特別なニュアンスを示す用法が習得される段階であると言える。各レベルの正用者の割合を基に本稿で提案した習得順序は、①たことがある→②もの形式名詞、こと形式名詞、こと名詞化→③ことができる→④Nのこと→⑤というもの一般化、こと(は)ない、ということ一般化、ということ内容、であった。誤用については、形式名詞の「もの」と「こと」を混同するものが多く見られた。

キーワード：もの こと KYコーパス 韓国語話者 習得

1. はじめに

日本語の文を生成する際、形式名詞の「こと」は、文脈においてある事柄を示す代用語となったり、準体助詞「の」とともに前接する文を名詞化する機能として用いられたりと、大変重要な役割を果たす。また、「もの」は「こと」と対立する概念として日本語学習者にとって理解しにくいものである。「新書」を素材とした読解教材「新書ライブラリー」の中にどのような表現が含まれているかを調べた鈴木(1998)には、形式名詞の中で「こと」「もの(みえないもの)」は「よう(様態)」とともに抜きん出て多いことが述べられており、これらの語の習得が日本語の上達に欠かせないものであることがわかる。

「もの」「こと」を扱った習得研究には、坪根(1997)がある。これは「ものだ」「ことだ」「のだ」の各用法について理解難易度調査、production調査を行ったものだが、この

場合の production 調査は英語で状況を示して、その場面に適した発話を書かせるもので、「ものだ」「ことだ」「のだ」のどれかを使うよう指示しているため、自然な発話とは言えない。言語の「習得」を言うためには自ら産出できることが必要であり、その調査は恣意的環境ではなく、可能な限り自然発話を分析することが望ましい。

そこで、本研究では韓国語話者の OPI (oral proficiency interview) データを用い、形式名詞「もの」「こと」の各用法について自然発話での使用状況を調査し、それに基づいて可能な限りその習得について横断的に考察し、習得順序を探る。また、資料中の誤用についての若干の分析も試みる。

2. 対象

本研究で分析対象としたデータは、OPI データの文字化資料 (KY コーパス¹⁾) である。KY コーパスは英語・韓国語・中国語話者各30名、計90名のデータからなるが、本研究ではそのうち韓国語話者30名分を対象とした。レベル分けは初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。

このような横断研究においては「日本語能力の規定は学習年数や、被験者が属する教育機関におけるクラス分けに基づくなど、極めて恣意性の高い基準で行われているのが現状」(鎌田1999: 227) であった。本資料は OPI という客観的かつ汎言語的基準により能力測定が行われており、上に述べたような研究の不備を克服するものである(鎌田1999: 227)。また、各学習者のそれまでの教育環境、教育内容等が異なる場合、それらの学習者のデータを横断研究の対象として扱うためにも、OPI のような客観的基準による能力測定は有効だと言える。

以下で学習者に付けられている番号は、始めの K が母語が韓国語であること、2 つ目のローマ字は OPI における判定結果(初級 N、中級 I、上級 A、超級 S) を表す。また 3 つ目にローマ字が付いている場合はサブレベルを表し、各レベルの中で下が L、中が M、上が H となっている。例えば KIM なら母語が韓国語、中級の中のレベルであることを示す。

3. 調査の方法

- 1) 資料より「もの」(104例)「こと」(375例)の用例を取り出し、それらを用法毎に分類する。
- 2) 各用例の正誤判断を行う。その際、当該用法を使うべきところで使っていれば接続形等の誤りがあっても正用とする。非用については、明らかに使用すべき箇所で使用していない場合のみ誤用に含める。
- 3) 各用法の正用、誤用の数を学習者別に一覧にし、学習者毎の正用カテゴリー数(正用

した用法の種類の数)を出す。

- 4) レベル別に各用法の正用者数をまとめ、それを基に正用者が60%以上の用法、正用者が30%以上60%未満の用法を取り出して表を作成する。それに基づいて習得順序の提案をする。
- 5) 複数の学習者に見られた誤用について分析する。

4. 用法分類

以下の分類は坪根 (1994, 2000)、金 (1989)、グループ・ジャマシイ (1998) を参考に行ったが、「ということがある」については本研究における筆者の分類である。

本研究において出現した用法のみ、例文とともに示す。

A. もの

- 1) 実質名詞：あんまり、いいものがなかったですから (KIM05)
- 2) ~もの：受験そのもののシステムが違うんで (KS07)
- 3) 形式名詞：韓国の印象的なものはなんですか。(KIM04)
- 4) というもの意味・定義：勉強だけですね、塾というものは (KAH03)
- 5) というもの一般化：人間成功失敗というものはだいたいなくて (KS07)
- 6) ものだ本性：夫婦はけんかするものだって、みんな言ってましたからね。(KS01)
- 7) ものだ感嘆：実際に行ってみると全然そんなことないし、私が勉強した事と全く違うところ、あるもんですね。(KS06)
- 8) もので理由：わたしは少し日本語ができたもんで、応募して、(KS01)
- 9) 定形表現：うん、あと、そんなもんかな。(KIH01)

B. こと

- 1) 実質名詞：手を洗って、服を着て、など、ことをして、(KIM06)
- 2) 形式名詞：そのことが大変だと思います。(KIM06)
- 3) 名詞 (N) のこと (こと化)：近い国のことを知るためにも言葉を勉強します。(KA01)
- 4) 名詞化：私の趣味は、歌を歌うことです。(KIL01)
- 5) こと (は) ない：実際に行ってみると全然そんなことないし、(KS06)
- 6) たことがある：メトロポリタンオペラへ行ったことあります。(KIM01)
- 7) ることがある：私たち頑張らなくてはならないなと思うことがあるし、(KA03)
- 8) ことができる可能性：うちで簡単に食べることできます。(KIM01)
- 9) ことができる能力：ピアノを、ひくことができます。(KIM04)
- 10) ことなく：他の日本人にも、劣ることなく、素晴らしい面を持っている人だと思います。(KS07)
- 11) ことにする：主人が [大学名] の留学生として、ここへ来ることにして (KIM01)

- 12) ことになる結果：あの人と、親しくつきあうことになりますが、(KIM05)
- 13) ことになる婉曲：けんかしながら仲良くしてください、ということになると思うんですけど (KS01)
- 14) ことになっている取決め：後には [大学名] に行くことになっています。(KIM03)
- 15) ということ一般化：講師の管理、ていうことが主な仕事です。(KS06)
- 16) ということ内容：実はそうではないんだなっていうことを感じましたよね。(KAH04)
- 17) ということだ伝聞：体にだけは気をつけなさい、ということですので (KS01)
- 18) ということだ解釈：研究の成果が出たっていうことですよ。(KS01)
- 19) ということだ理由・根拠：もっと日本語を勉強したいなっていうことで、日本へ来たんですね。(KS01)
- 20) ということがある状況：日本では大学に合格して、4年間、学問と共に青春を楽しむということがありますが、(KS07)
- 21) ということがある認識：今のところはいやー行けないだろうねっていうことはあるんですけど (KS01)
- 22) ということがある事情：もちろん彼が悪いことをしたということはあるけれども、(KS07)
- 23) 定形表現：あることは、あるんですけど、(KAH01)
もし言うことをきかないと、(KS01)

5. 結果と考察

5.1. 各用法の出現分布の概要

表1-1、1-2は学習者別に「もの」「こと」各用法の使用数を示したものである。正用数/誤用数で示し、数字が1つのものは正用の数を表す。表の右端に総使用数と正用カテゴリ数（正用した用法の種類の数）を示してある。なお、「もの」を使うべきところで「こと」を使用した場合は「こと」の誤用、「こと」を使うべきところで「もの」を使用した場合は「もの」の誤用としてカウントした。

まず、「もの」(表1-1)について見ると、初級では実質名詞で1名が使用している他は、使用が見られない。中級以降で形式名詞としての使用が見られるようになる。中級と上級ではほとんど使用状況に違いはなく、上級までは形式名詞が中心となっている。上級のKAH01と超級のKS06が形式名詞を使用していないが、これは「もの」を使ってもいい文脈で準体助詞の「の」を使用しているためだと思われる。(例：昔のままのあの、なんか、家とか、なんかそういうのが、今、残ってないと思うんですけど (KAH01)) 上級上になると若干ではあるが用法の広がりが見られはじめ、超級になると、「というもの (一般化)」「ものだ」「もので」等、更に使用の広がりを示すようになる。「～もの」はKS07がすべて

表1-1 出現分布表（もの104例）

学習者	もの 実質名詞	～もの	もの 形式名詞	というもの 意味・定義	というもの 一般化	ものだ 本性	ものだ 感嘆	もので 理由	定形表現	総使用数	正用カテ ゴリー数
KNL01										0	0
KNL02										0	0
KNM01	2									2	1
KNH01										0	0
KNH02										0	0
小計	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	平均0.2
KIL01										0	0
KIL02	0 / 1									0 / 1	0
KIM01										0	0
KIM02	1		1							2	2
KIM03			1		1					2	2
KIM04			1							1	1
KIM05	1		3							4	2
KIM06			3							3	1
KIH01			3 / 1						1	4 / 1	2
KIH02										0	0
小計	2 / 1	0	12 / 1	0	1	0	0	0	1	16 / 2	平均1.0
KA01										0	0
KA02	0 / 1									0 / 1	0
KA03			0 / 1							0 / 1	0
KA04			1							1	1
KA05			1							1	1
KA06			3							3	1
KAH01										0	0
KAH02			2							2	1
KAH03	1		2 / 1	1					0 / 1	4 / 2	3
KAH04	1		14					1 / 1		16 / 1	3
小計	2 / 1	0	23 / 2	1	0	0	0	1 / 1	0 / 1	27 / 5	平均1.0
KS01			6		1	1		2		10	4
KS03			4		2					6	2
KS06							1			1	1
KS07		9	14 / 1		2		1			26 / 1	4
KS09		2	6							8	2
小計	0	11	30 / 1	0	5	1	2	2	0	51 / 1	平均2.6
使用数計	6 / 2	11	65 / 4	1	6	1	2	3 / 1	1 / 1	96 / 8	

表1-2 出現分布表 (こと375例)

学習者	こと 実質名詞	こと Nのこと こと化	こと 名詞化	こと(は) ない	たこと がある	こと がある	こと できる 可能性	こと できる 能力	こと なく	こと にする	結果	こと になる 婉曲	こと はなつて いる取り決め	こと 一般化	こと 内容	こと だ伝聞	こと だ解釈	こと 理由・根拠	こと で ある状況	こと ということ とある認識	こと ということ とある事情	こと 定形 表現	こと 総使用数	こと 正用カテ ワリ一敷	
KNL01																							0	0	
KNL02																								0	0
KNM01					1																		1	1	
KNH01						2																	0	0	
KNH02																							2	1	
小計	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	平均0.4	
KIL01			2																				2	1	
KIL02	1		2		3																		6	3	
KIM01	1		1		4/1		2	2		1						1							12/1	7	
KIM02	1		4/1			1																	6/1	3	
KIM03	1				3		2	2		0/2			2										8/2	4	
KIM04	1		3		2		2	1/2															9/2	5	
KIM05			1		5						3												9	3	
KIM06	1		3																				5	3	
KIH01	6/3		1					1/1															8/4	3	
KIH02			3		1/1		1	1															7/1	5	
小計	1	14/3	0	18/1	1	18/2	1	7	5/3	0	1/2	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	72/11	平均3.7	
KA01	3/1	3	0/1		1		1																8/2	4	
KA02					8		1																9	2	
KA03	3/5	1	8		6	3	2						0/1										23/6	6	
KA04	7		3		4/2																		14/2	3	
KA05	2/1	3			3										1								10/1	5	
KA06	0/1	2			2		1																5/1	3	
KAH01	9/2		3		2		1																16/2	5	
KAH02	9		2		2		1						0/1								1		17/1	7	
KAH03	9		2		7/1		3																23/1	5	
KAH04	4/2		1/1		3	2								2	2								16/3	7	
小計	0	46/12	6	24/2	0	37/3	6	11	1	0	0	0	0/1	2/1	3	0	0	0	0	0	1	3	141/19	平均4.7	
KS01	5	2	1		1					2				1	7/1	1	1	2					26/1	13	
KS03	6	1												1									8	3	
KS06	9	7			2	4								2	6								31	7	
KS07	15	3	4		1	3			1		2		1	6	2	1	1	1	1	4			45	14	
KS09	6	1	2		3									2	4								18	6	
小計	0	41	14	7	4	10	0	0	1	0	4	1	1	6	23/1	3	2	2	1	2	5	1	128/1	平均8.6	
使用数計	1	101/15	20	49/3	5	68/5	7	18	6/3	1	1/2	7	1	3/1	8/1	26/1	4	2	3	1	2	6	4	344/31	

「そのもの」、KS09がすべて「戦争もの」という言葉で使っており、数は多くなっているがバリエーションはない。

つまり、中級段階で形式名詞の習得が進むが、「というもの」を添加し対象を直接的に提出することを避けて一般化したり、モダリティを表す「ものだ」等を使用したりすることによって、より表現を豊かにできるのは、超級になってからだと言える。正用カテゴリー数のレベル別平均値を見ても、初級0.2でゼロに近く、中級と上級は共に1.0と差はないが、超級になると2.6と2倍以上に増えており、初級から中級、上級から超級の段階で「もの」の使用に変化が見られるということを示唆している。

次に「こと」(表1-2)を見てみる。初級では経験の「たことがある」のみが使用されている。この用法は、中級、上級と進むに連れて使用数が増えるが、中級、上級では誤用も見られる。中級に入って、形式名詞、名詞化、「ことができる」(可能性、能力)の用法が多く出現するようになる。上級で初めて現れるのが名詞を「こと」化する「Nのこと」、「ということ」(一般化、内容)、「ということだ」(理由・根拠)、「ということがある」(事情)である。「Nのこと」のように「~のこと」を後続させて、名詞で表される個体を「こと」化する、つまり、存在物Nに「こと」を付けることでNに関する事柄を表すようにするという概念や、事柄を直接的に述べるのではなく、「ということ」を後続させることで先行する事象を一般化したりすることは、「たことがある」「ことができる」等のように定形表現である特定の意味を示すものと比べて、習得されにくいものだと思われる。超級では、上級で出現した項目のうち、5名全員が「Nのこと」、4名が「ということ」(一般化、内容)を使用しており、これらの項目は超級の時点までに習得されていると言えよう。その他、超級では、中級、上級で見られた「ることがある」「ことができる」の使用は見られないが、上級で使用された用法の他に「ということだ」(解釈)、「ということがある」(状況、認識)等、様々な用法を広く使用している様子がうかがえる。中級、上級で見られた「ことができる」が超級では使われていないが、これは同資料でヴォイスの習得について調査した田中(1999)によると、超級5名全員が可能の形を使用していることから、可能を表す際に「ことができる」でなく可能形を使って表しているものと考えられる。

以上のことから、「こと」は実際の使用状況の少なさとの関係も考えられるが、実質名詞としての用法よりはむしろ、初級の学習項目である「ことがある」が先にproductionされるようになり、中級で形式名詞、名詞化用法の習得が見られ、上級で「Nのこと」「ということ」「ということだ」「ということがある」の一部の用法が使用されるようになり、超級の時点でその用法の範囲が広がるということがわかる。

正用カテゴリー数を見ると、初級が0.4、中級が3.7でこの間で大きな増加が見られる。中級から上級(4.7)は若干の増加、上級から超級(8.6)では再び大きな増加となっている。ただし、総使用数の推移を見ると、初級から中級で大きく伸びた後、中級から上級で

表2-1 「もの」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	もの 実質名詞	～もの 形式名詞	もの 形式名詞	というもの 意味・定義	というもの 一般化	ものだ 本性	ものだ 感嘆	もので 理由	定形表現
初級 (5)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
中級 (10)	2	0	6	0	1	0	0	0	1
上級 (10)	2	0	6	1	0	0	0	1	0
超級 (5)	0	2	4	0	3	1	2	1	0

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

表2-2 「こと」レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	こと 実質名詞	こと 形式名詞	Nのこと こと化	こと 名詞化	こと(は) ない	たことがある	ることがある	ことができる 可能性	ことができる 能力	ことなく	ことにする
初級 (5)	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
中級 (10)	1	7	0	9	1	6	1	4	4	0	1
上級 (10)	0	8	3	8	0	10	3	7	1	0	0
超級 (5)	0	5	5	3	3	3	0	0	0	1	0

レベル	ことになる 結果	ことになる 婉曲	ことになって いる取り決め	ということ 一般化	ということ 内容	ということだ 伝聞	ということだ 解釈	ということ 理由・根拠	ということが ある状況	ということが ある認識	ということが ある事情	定形表現
初級 (5)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級 (10)	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
上級 (10)	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	1	2
超級 (5)	2	1	1	4	4	2	2	1	1	2	2	1

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

も2倍に増加している。形式名詞、名詞化としての使用や「ということ」等の使用が増えたことにより、上級では中級と比べて抽象的で複雑な文がより多く生成されていることが考えられよう。超級では正用カテゴリー数、使用数ともに増加している。つまり、「こと」も「もの」同様、初級から中級、上級から超級の段階で使用カテゴリーが広がり、中級から上級では使用カテゴリーに大きな差はないが、使用数が増えることで複雑な文をより多く使用していると言えるだろう。

5.2. 習得状況

表1-1、1-2より各レベル毎の正用人数（1つでも正用のあった人の数）をまとめたものが表2-1、2-2である。更に、表2-1、2-2を基にレベル別習得状況をまとめた（表3）。OPIという性格上、多くの出現を期待できない用法もあり、各用法を同じように議論することはできないが、少なくとも多くの学習者によって使用（正用）されているものについては、そのレベルで習得が進んでいるものと考えることができる。そこで、各レベルで60%以上の正用者がいる用法を習得段階が高いもの、30%以上60%未満のものを少なくとも習得が始まったと考えられるものと規定し、それをまとめたものが表3である。初めてその割合に達した用法が各欄に入れてある。

表3 レベル別習得状況

レベル	習得段階（高）：正用者60%以上	習得段階（初）：正用者30～60%
初級		たことがある
中級	もの形式名詞 こと形式名詞、名詞化 たことがある	ことができる可能性、能力
上級	ことができる可能性	Nのこと ることがある
超級	というもの一般化 Nのこと こと(は)ない ということ一般化、内容	～もの ものだ感嘆 ことになる結果 ということだ伝聞、解釈 ということがある認識、事情

これによると、まず初級で「たことがある」の習得が見られはじめ、この用法は中級で正用者が増えて習得が進んでいることがわかる。中級ではこの他、形式名詞の「もの」「こと」、名詞化の「こと」の習得が一気に進み、「ことができる」(可能性、能力)も習得が見られ始める。

上級では、「Nのこと」「ることがある」の習得が始まり、「ことができる」(可能性)は習得が進む。超級になると、「というもの」「ということ」という形を使って前接する内容を一般化する用法や、「ということ」(内容)、「こと(は)ない」の正用が急に多く見られるようになり、この段階で習得が一気に進むと考えられる。上級で習得が始まったと見られる「Nのこと」も習得が進む。この他、「～もの」の形や、「ものだ」(感嘆)、「ことになる」(結果)、「ということだ」(伝聞、解釈)、「ということがある」(認識、事情)といった文末用法が広く習得され始める。

以上レベル別習得状況について述べてきたが、ここから可能な限り習得順序を探ってみる。習得段階初(正用者30%以上60%未満)から習得段階高(正用者60%以上)に段階が進んだ時点で習得されたとし、より早く習得段階初に現れ、より早く習得段階高に達したものを先に習得されたものと規定すると、以下のような順序が提案できる(表4)。なお、習得段階高に現れていない用法は考察対象から外した。

「ことができる」については、動詞の可能形が使用されている可能性もあるため、単純に正用者数で考えるべきではないと考え、()に入れて示した。「ことができる」の習得は、この段階より遅いということはない、ということと言えるだろう。

表4 習得順序

取得 順序 ↓	1	たことがある
	2	もの形式名詞、こと形式名詞、こと名詞化
	3	(ことができる可能性)
	4	Nのこと
	5	というもの一般化、こと(は)ない、ということ一般化、ということ内容

韓国語には日本語の「もの、こと」にあたる語があるため、これらの習得は比較的容易だと思われるが、韓国語では「もの」と「こと」を同じ語で表現するため、この二語の混同も多く見られた。この点については、次項で述べる。

5.3. 誤用分析

誤用の中から「もの」と「こと」の混同、「たことがある」について、代表的な誤用例

を示し、分析してみる。

1) 形式名詞「もの」「こと」の混同

例 a : 人間を殺したという側面からはじめて、金銭的な蓄積もあって、あったし、いろんな*ものがあったんで (KS07)

例 b : 補助とか、そういう*こと、受けられればいいんだけど。(KAH04)

このタイプの誤用は超級に至るまで見られ、最も基本的な意味に近い用法が実は使い分けの難しいものであるということがうかがえる。誤用数は「こと」の代わりに「もの」を使うものより、「もの」の代わりに「こと」を使用してしまうものの方が多かった。上記bの例で見ると、「受ける」対象は「もの」である必要があるが、「補助をする／受ける」という事柄として捉えてしまっているものと推測される。「こと」は述語（動詞、形容詞、形容動詞）を含む表現、あるいはそれらが名詞化された形で表される個別的な事象であり、「もの」は言葉なしでも心にとらえることのできる存在で、名詞句で表されるということをもとに理解させることも必要であろう。

2) たことがある

例 : T その時どうしましたか

S (前略) 救急室へ行って、それで、救急 (中略) しりょうをもらったことがあります (KIM01)

この例は過去の経験でなく単なる過去の出来事に「たことがある」を使用している。数は少ないが、上級での誤用も見られる。誤用をした学習者には、「たことがある」は過去にその事柄の経験があるかないかを示すものであることを再確認する必要がある。

6. まとめと今後の課題

本研究では形式名詞「もの」「こと」の各用法の自然発話における使用と習得について考察し、その習得順序についての可能な限りの提案を行った。以下に本研究において明らかになったことをまとめる。

- 1) 本研究から推測できる習得順序は、①たことがある→②もの形式名詞、こと形式名詞、こと名詞化→(③ことができる)→④Nのこと→⑤というもの一般化、こと(は)ない、ということ一般化、ということ内容、の順である。
- 2) 「もの」「こと」共に、ほとんど使用例のなかった初級から中級に進む段階で使用数、種類が伸びる。中級から上級の段階では、用法の広がりは見られないが形式名詞、名詞化の使用数が増加しており、複雑な文をより多く産出するようになっていると考えられる。上級から超級の段階で再び使用数、種類が増え、様々な表現を広く使用するようになる。
- 3) 中級は形式名詞、名詞化の用法といった構文的に必要な機能が習得される段階、超級

は「というもの」「ということ」「Nのこと」のような対象を直接指し示さない用法や、様々な文末表現といった、特別なニュアンスを示す用法が習得される段階である。

- 4) 形式名詞の「もの」と「こと」を混同する誤用が多く見られた。また、「たことがある」を過去の経験でなく、過去の出来事を表すのに用いる誤用も現れている。

本研究は形式名詞「もの」「こと」の使用を自然発話の資料を用いて考察したという点においては、先行研究から一歩進んだと言えるであろう。今後は、本研究で提案した習得順序を検証するために、併せて特定の学習者の習得状況を縦断的に調査していくことが必要である。また、今回論じることのできなかつた用法、すなわち自然発話で出現しにくい用法については、発話環境を整えることによって、その習得について検証する必要があるだろう。

本稿では韓国語話者のみについて分析を行ったが、今後は英語話者、中国語話者についても分析を行い、比較を行うつもりである。

注

- 1) 「KYコーパス」とは文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』（研究代表者カッケンブッシュ寛子）において鎌田修氏と山内博之氏が中心となつて行ったOPIの文字化資料を指す。

参考文献

- 鎌田修（1999）「KYコーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語習得に関する総合研究』科研研究報告書08308019 代表者 カッケンブッシュ寛子、pp.227-237
- 金銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』29、東北大学文学部『国語学研究』刊行会、pp.21-34
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 鈴木庸子（1998）「上級日本語読解教材『新書ライブラリー』の表現調査」『文部省科学研究費補助金重点領域研究「人文科学とコンピュータ」1997年度研究成果報告書』、pp.87-94
- 田中真理（1999）「OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況：英語・韓国語・中国語話者の場合」『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』、pp.335-350
- 坪根由香里（1994）「『もの』『こと』『の』に関する考察 —その意義素を求めて—」、未公刊修士論文、南山大学
- 坪根由香里（1997）「『ものだ』『ことだ』『のだ』の理解難易度調査」『第二言語としての日本語の習得研究』創刊号、pp.137-156
- 坪根由香里（2000）「日本語教育の読解教材における『こと』の分析」『小出記念日本語教育研究会論文集』8、pp.53-67
- 原田登美、小谷博泰（1991）「日本語『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編』84、pp.1-34
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店